

特別支援教育実践研究会第5回実践研究発表会 発表要旨

開催日時：平成28年11月5日（土）15：15～16：15

（発表時間：15：30～16：15）

於：上越教育大学特別支援教育実践研究センター

【発表1】

特別支援学校における音楽鑑賞の指導

齋藤一雄（元上越教育大学）・渡邊紗彩・長谷川徹

特別支援学校の音楽の授業において、知的障害児を対象にDVDを活用し、視覚教材や打楽器演奏等を加えた音楽鑑賞の指導を行い、対象児の反応を分析し、教材や教材の提示方法について検討した。対象は、A県立B特別支援学校中学部重複学級2組に在籍する生徒2名である。教材は、チャイコフスキー作曲「白鳥の湖」より「4羽の白鳥の踊り」、同「くるみ割り人形」より「金平糖の踊り」、プロコフィエフ作曲「ロミオとジュリエット」より「騎士たちの踊り」で、バレエをDVDによって演技と音楽を一緒に鑑賞した。どれも集中して聴いていた。アニメと歌による「みんなのうた」「赤鬼と青鬼のタンゴ」「フニクリ・フニクラ」「大きな古時計」は、よく知っている曲なので、集中して聴くことができていた。絵カードやウッドブロックの演奏なども加えたが、振ったりたたいたり、積極的な反応がみられた。

【発表2】

集団参加が苦手な児童に対する校内支援体制の一例

芦口玲子（福島県南相馬市立石神第二小学校）

運動会後より教室で学習することができなくなった新入児童に対し、1名専属でかかわる学習支援員を配置し、通常学級や特別支援学級、通級指導教室などが連携して支援にあたった。十分な遊びやかかわりを体験してこなかった児童の実態を把握し、時間をかけて学校、学級集団へなじませていった取り組みの紹介。学習支援員が主となって、行った支援を記録した。朝や放課後、担任やかかわった職員が加筆して支援や児童の様子を把握していった。3学期、学校側の支援にこたえる形で母親が医療とつながり、服薬により学習に対する意欲が改善され、特別支援学級に入級するに至った。

【発表3】

書字を苦手とする児童への支援方法について（2）

井上和紀（新潟県新潟市立中野山小学校）

書字を苦手とする小学3年生の児童に対し、漢字を書くことを通してその苦手意識を払拭させようとする試みである。ひらがなの形を取ることが難しく、1年時終了までようやくひらがなが書けるようになった。鏡文字が見られたり、「ふ」の形が取りにくい様子が見られたりする。漢字は何も見ないで書くことを嫌がり、宿題でも教師が赤色等の鉛筆で薄く書いてやったところになぞり書きすることを望んでいる。また、書き順の通りに書くことが苦手である。この児童に対し、漢字の部首に着目させ、漢字を分割して見るようにさせようと試みた。①一度紙に書いた漢字を、本人の目の前で部首に分けるように切り取って並べる。②漢字を部首等に色分けして薄く書き、それをなぞらせて練習させる。以上2つの方法を試みた。その結果、苦手意識が以前より減り、漢字スキル1ページあたりにかかる時間が短くなったという結果が得られた。

【発表4】

小集団学習場面における特別な教育的ニーズのある児童の

他者との係わりの変化を促すための支援課題（その3）

石田脩介・山下拓也・棟方智美・高井透・楠淳・池田吉史・大庭重治（上越教育大学）

特別な教育的ニーズのある児童の他者とのかかわりの変化を促す際の支援方法の開発では、互いに情報を持ち寄って解決することが求められる情報統合型課題を基本として、そこに多様な意見も反映させることのできる意見集約型課題の活用を工夫していく必要がある。本研究では、このようなねらいをもって独自に開発した課題の中から、「すごろくえすと」と名付けたすごろく課題について紹介する。この課題には、小集団の中での各自の役割、サイコロを振る順番、情報カードの割り振りを相談したり、各自の割り振り情報カードを手掛りにして主人公の能力を決定したりする活動が含まれていた。この課題の遂行過程において、能力の異なる児童間の相談場面における意見交換の様子を分析することにより、他者との係わりの変化を促した。

【発表5】

知的障害者における新しい作業への柔軟な取り組みに関する

支援具のあり方と支援者のかかわり方

山下拓也・小出芽以・池田吉史・大庭重治（上越教育大学）

知的障害者が勤務する福祉施設等では、様々な種類の作業が扱われており、これらの作業が比較的短期間のうちに切り替えられながら日々の仕事が構成されている。しかしながら、言語理解やワーキングメモリの特性から、新規の作業における「柔軟さ」に困難を示す場合がある。そこで、知的障害者と支援者が協働して作業的学習に取り組む場面を通して、新規の作業種において柔軟に対応できるようになるためには、どのような支援が必要であるのかを実践的に検討した。その際、手順表等の支援具のあり方とともに、主支援者や副支援者のかかわり方を検討した。

【発表6】

特別な教育的ニーズのある子どもの他者との係わりに伴う

創造性の拡大を促すための支援課題

小出芽以・戸澤なつみ・佐藤懸斗・金子孝史・下田宏・池田吉史・大庭重治（上越教育大学）

創造性は、他者との係わりを通して知識や技能が高まることによって形成される固有の心理特性である。特別な教育的ニーズのある子どもの創造性の拡大を促すためには、他者との係わりの中で対話の生成や模倣を促すことが重要であり、このような係わりの機会を積極的に設定していくことが必要とされている。

本研究では、子どもの創造性の拡大を促すために独自に開発した課題の中から、惑星のテーマに合わせて架空のモンスターを表現する「宇宙ドリーマー」課題を紹介する。この課題では、まず与えられた不完全図形を使用して、各自がテーマに沿ったモンスターを描き、その説明を書き添えた。その後、お互いの作品を鑑賞し、その独創性やテーマへの適合性を評価する場面を設定した。その鑑賞時に観察される他者との対話の様子や、鑑賞活動に伴う自らのモンスターの表現の変化を分析することにより、創造性の拡大における係わりの効果を検討した。

【発表7】

知的障害者の実行機能特性に基づいた他者と音楽を楽しむことを促すための支援方法

戸澤なつみ・金子孝史・池田吉史・大庭重治（上越教育大学）

音楽は他者と楽しさを共有することで、満足感や達成感がいっそう大きくなる。しかし、1人であれば音楽を楽しむことができても、その楽しさを他者と共有できない場合がある。本研究の対象者は、音楽を好み、好きな音楽に合わせて1人でダンスをすることを楽しんでいて、他者と一緒に音楽を楽しむことは難しかった。そこで本研究では、他者との音楽活動を促すために、対象者の強みである読み書きや言語でのやりとりの力を活用して、「活動の見通し」と「支援者のかかわり」を中心とした実行機能特性に基づく支援を実施した。

【発表8】

知的障害を伴う ASD 児の実行機能特性に基づく課題遂行を促す支援方法

坂口卓也・波多野翔太・下田宏・高井透・池田吉史・大庭重治（上越教育大学）

活動に主体的に取り組むためには、①目標を理解する、②目標を達成する方法を考える、③方法通りに行動する、④方法がうまく行っているか評価し、必要に応じて修正するといった過程を自らの力で踏む必要がある。こうした認知処理過程は実行機能によって支えられているが、発達障害や知的障害のある子どもはその弱さがあることが指摘されている。特に、知的障害を伴う ASD 児では、言語コミュニケーション能力の低さも伴って、活動への主体的な取り組みが制限されていることが少なくない。本発表では、知的障害を伴う ASD 児の主体的な活動への取り組みを促すことを目的として、実行機能の観点から考案した支援方法を紹介し、これまでに得られた結果からその効果を考察する。

【発表9】

教育現場における表出行動の乏しい超重症児を対象とした行動評価に関する検討

寺島ひかり・八島猛（上越教育大学）

周産期医療・医療技術の進歩により、継続的かつ濃厚な医療を必要とする超重症児は増加傾向にある。超重症児の臨床像は様々であるが、本稿では、表出行動の乏しい超重症児を対象としている。従来、こうした子どもたちを対象とした研究では、働きかけに対する反応を評価する方法として、生理学的指標が用いられてきた。これらの研究によると、一見反応の乏しい子どもであっても、働きかけに対して何らかの反応を示していることが見出されている。しかしながら、生理学的指標に基づく評価方法を日々の授業に適用することは困難であるとの指摘がある。これらのことは、教育現場において実施可能な超重症児を対象とした行動評価の方法について検討する必要があることを示唆している。本稿では、超重症児を対象とした教育・研究上の課題を概観し、教育現場に適用しうる行動評価の方法を検討する。

【発表10】

脳性麻痺のある生徒を対象とした数学科における自己調整学習の支援

百瀬翔悟・弓場ひかり・古賀達郎・寺島ひかり・森谷美雪・永井桃代・八島猛・大庭重治・池田吉史
(上越教育大学)

成功する学習者は学習課題に方略をもって取り組んでいる。彼らは学習目標の達成にむけて、短期的な目標を設定し、達成の遂行基準をきめて、達成状況をモニターし、学習活動をよりよく整える。要するに、熟達した学習者は自らの学習を自己調整しているのである。一方で近年、認的処理能力に独特の特性があるために、特定の教科学習における自己調整に困難を示す児童生徒の存在が報告されている。本稿では、数学科の学習に困難がある脳性麻痺のある生徒に対して行われた自己調整学習の支援について報告する。